



# 放射線相談室だより ~11月号(35号)~

平成29年11月17日

1

## 地区の集い・婦人会の皆さんと座談会



今回は熊谷先生による、地区の集いと婦人会の座談会の様子をご紹介します。

### <地区の集いの様子>



皆さまからはいろいろな質問や意見が出ました。いくつかをご紹介します。



体の中にあるセシウムが2~3ヶ月で半分になると聞いたが、そのまま経てばセシウムはゼロになりますか？

セシウムはおしっこに出ていきますので、大人の場合、おっしゃる通り2~3ヶ月で半分になる速さで減っていきます。ゼロかどうかは調べられませんが、どんなに詳しく調べても検出できないレベルになります。



木戸ダムの底にあるセシウムはどうなっていますか？

セシウムは底の泥に固まっており、水に溶けている状態ではないです。固まった状態で約30年かけてセシウムが半分になります。





次は婦人会での座談会をご紹介します。ここでもいくつか意見や質問が出ました。

## <婦人会の様子>



まだ、第一発電所から外に放射性物質は出ていますか？



発電所の中では空気を調べていますが、現在は出ていません。地面へのコンクリート吹き付けなども行われたので、舞い上がりも少なくなったようです。



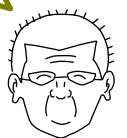
販売目的の農作物は全て放射線量を測定しているが野菜などは全てN.D.となっています。単価・手間等の問題もあり、いつまで測定を続けるのですか？



出荷する農作物の測定は県が管理しているので、食品の出荷制限等の解除も県が決めています。測定しても検出されない状況が続いていますが、測定しているから安心という意見もあります。食べ物の放射性物質の状況を、周りの方々にもっと知っていただけると、状況はかわっていくかもしれませんね。



今回は特に議題なども決めず皆さんが思っていることを話す会にしたので、話が弾むか心配しましたが、話が途切れることもなくスムーズに進みました。今後も地区の集いや婦人会を中心にいろいろな相談会や話し合いの場を広げていきたいと思います。ぜひ、皆さんもご参加ください。



# 食品のモニタリング結果総括表

## (平成 29 年 10 月実施分)



【基準値】：一般食品 100Bq/kg 牛乳・乳幼児製品 50Bq/kg 飲料水 10Bq/kg

規制のない食品	検査数	基準値未満	基準値以上	備考 (基準値以上の品目)
野菜	14	14	0	
根菜・芋類	14	14	0	
山菜・きのこ	8	4	4	なめこ・マツタケ
果物	14	14	0	
穀類	2	2	0	
種実類	2	2	0	
魚介類	—	—	—	
加工食品	—	—	—	
飲料水	—	—	—	
その他(肉類など)	—	—	—	
総検査数	54	50	4	

食品モニタリング結果の詳細については、食品分析検査センター(公民館内)と放射線相談室に置くほか、広野町ホームページに掲載しますのでご利用下さい。

右の QR コードを読み取ったあと、東日本大震災→放射線量・除染関連→放射線量情報の項目の中の「食品モニタリング」をクリックしていただくと見ることができます。



場 所	放射能簡易分析検査センター(公民館1階)
曜 日	月曜日から金曜日(祝日を除く)
受付時間	午前8時30分～午後4時30分まで

## 広野町各地区の放射線量

平成 29 年 11 月 15 日 8 時 10 分現在(天候：晴れ)の町内各地区代表的な個所のモニタリングポストの数値をお知らせします。

測定箇所	放射線量率(μSv/h)	測定箇所	放射線量率(μSv/h)
広野小・中学校	0.11	広野町役場	0.11
広洋台地区集会所	0.11	高速バス利用者駐車場	0.17
ニツ沼公園 <sup>注2</sup>	0.10	上田郷橋付近 <sup>注1</sup>	0.14
長畑地区集会所	0.12	北沢複合交差点	0.15
小滝平浄水場 <sup>注2</sup>	0.09	県道広野～小高線沿	0.15
ふたば未来学園高等学校	0.07	仮置場	0.12

注1 平成 29 年 3 月設置

注2 ニツ沼公園、小滝平浄水場のモニタリングポストは現地では n Gy/h(ナノグレイ毎時)で表示されていますが、μSv/h(マイクロシーベルト毎時)に換算して掲載しています。

# 放射線健康対策委員会からの放射線に関するコラム

## 放射線と放射能－その偶然と必然（2）

東日本国際大学客員教授 地域共生学研究所所長 北見 正伸

前回は、「放射線」と「放射能」の発見には【偶然】という要素が大きく関与していること、そしてこの偶然による発見が、その後ニールス・ボーア（デンマーク）等によって物理学の世界に革命的な理論である量子論（量子力学）をもたらす契機となったことを述べました。

ニールス・ボーアは、量子論の育ての親ともいわれており、私の恩師が原子核研究をしていた戦前から戦後の理化学研究所仁科研究室にも馴染みが深い人物であり、また彼が論文発表した「原子核分裂の予想：ウラン同位元素；ウラン 235」は原子爆弾開発の重要な理論的根拠であったため、当時の原子爆弾の開発を憂慮して原子力の平和利用を世界に訴え続けた人物でもありました。

当時の理化学研究所は東京・駒込にあり、長岡半太郎（物理学）、本多光太郎（磁性物理学）、鈴木梅太郎（農芸化学）をはじめ、真島利行（有機化学）、大河内正敏（造兵学、経営者）、寺田寅彦（物理学）、仁科芳雄（物理学）、坂口謹一郎（醗酵微生物学）、ノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎（理論物理学）および湯川秀樹（理論物理学）、そして喜多源逸（応用化学）、日本で最初の女性理学博士の黒田チカ（有機化学）ら、多くの優れた逸材によって世界を相手に科学研究の鎬を削っていました。

仁科研究室で宇宙線・原子核を研究していた恩師（湯川の中間子を世界最初に発見したが戦争の影響でノーベル賞を逃した悲劇の学者と言われている、また戦前戦中は日本の原子爆弾開発の責任者となる）からは「科学は諸刃の剣。有益な反面、恐ろしい」と常々論されていました。

我々にとって、そしてこれからの時代を背負っていくであろう若き科学者にとって、さらに人類にとって「科学は諸刃の剣」という観点が必要であり如何に重要であるか、今回の原発事故はこの最も基本となる命題を我々に突き付けたのです。

使用済み核燃料を最終的に処理する科学的手段が確立されないままに、見切り発車してしまった原子炉技術、およそ地震や津波を想定する必要がほとんどないアメリカの原子炉理論と技術を、世界有数の地震国である日本に安易に導入してしまった原子力発電技術、東京電力内部で東日本大震災前に既に大津波を想定した議論があったにもかかわらず、その具体的な対策を怠ったと思われる企業倫理、これらの要素を総合的に考えた時、今回の原発事故は【偶然】であろうか？ それとも【必然】であろうか？



発行者 広野町放射線相談室 080-9252-4773

広野町健康福祉課放射線健康相談係 0240-27-2113